

多文化共生社会におけるコミュニケーションシリーズ第 5 回

コミュニケーション教育を考える

～言語力の不可避と不可能～

講師：青山学院大学教授 荻宿俊文氏

日 程：2014年6月7日（土）

時 間：13:00～14:30 講演

14:30～15:30 振り返り・質疑応答

会 場：東京大学福武ホールラーニングシアター

主催：一般財団生涯学習開発財団

共催：特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構

PART.1

多元的共生社会におけるコミュニケーションシリーズも今回で 5 回目。今回も荒天にもかかわらず多くの方々にご来場いただきました。

第 1 回目にご講演いただいた青山学院大学教授荻宿氏が再びご登壇くださり、コミュニケーション教育と言語力のつながりについて ご自身の大学での実践を交えながら、参加者の心に届くリアルな内容となりました。

まずは、今回の講演をつらぬく テーマとして、コミュニケーション教育と言語力から見いだした 4 つの疑問を提示。これを皆さんと考えていきたいと荻宿氏は話しを始めました。

〈4つの疑問〉

- 1 モデルになる国がないとしたら
- 2 学ぶことが激変する予感
- 3 教えることはどうなればいい
- 4 考える子どもは育てられるのか

「正解」と「納得解」

2014年、新学習指導要領に言語力（コミュニケーション能力）育成が明記されました。

人々の共同生活を豊かにするためには、個人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、あるいは他者を理解し、他者との意見を共有し、お互いの考えを深めて行くことが望まれています。日常のコミュニケーションから協同的な関係を築くよう努めることが重要です。

〈映像資料〉(BE ポンキッキーズより)

覚える学習と使える学習について考察してみましょう。

今、小中高で新しい学習の考え方として、「使える学習」が話題になっています。「覚える学習」とは、教科書に書いてある正しい答え＝正解を覚えていくことです。今までは九九が分かるようになったり、人に伝わる文章が書けるようになったりする「覚える学習」が教育の中心でした。

今はもうひとつ、使える学習という考え方が入ってきています。使える学習は「納得解」を導き出すことです。納得解とは、グループで自分たちの意見を出し合い、自分たちが納得し

で導きだした答えのこと。この「正解」と「納得解」を必要としているのがこれからの学習です。グループで話して納得解を出すことは、大人になってからも必要なことなので、小学生から「使える学習」が注目されています。また、この「使える学習」は、現在、世界で最も注目されている学力「コミュニケーション力」に関わることなのです。

いわゆるグローバル経済世界で国々が経済的に結びつき、人の交流が国を超えて行われる環境が整っている。これからそれがどんどん進んでいく。自分以外の国の人たちと当たり前のように関わったり仕事をしたりしていかななくてはいけなくなります。そのときに納得解を作っていくことと、それを支えるコミュニケーション力が必要になります。

映像を観ながら考えて見ましょう。

□ひとつは「使える学習」のある小学校の例。比べる、分類する、結びつける、まとめるというカードを使って授業をしている。

—もうひとつはコミュニケーション教育からのアプローチ例。

学校現場にアート系のワークショップ教室にやってきたアーティストが先生となり、演劇を創ることからコミュニケーション教育をする。言語だけで考えるのではなく身体を使って、表現をすることでコミュニケーション教育をしている。

日本の言語力＝コミュニケーション教育に大きな影響を与えたのが PISA 型学習観です。

PISA 型学力観からは E U の挑戦が見えてきます。2 つの世界大戦が原因で、経済的な統合、政治的な統合を果たし、多元的共生社会の構築をめざしているのです。E U の挑戦を通して見えてくることは文化的融合＝異文化教育。しかし、私たちが自覚しなくてはいけないこと

は、対話のポイントがヨーロッパと私たちではズレているということです。それは仲良くなるために対話があるという日本の考え方と、合意形成をするために対話があるというヨーロッパの考え方の違いを認識することが重要だということです。

つまり、個人に対する考え方が違うということ認識しないでコミュニケーション力を語ってはいけません。ヨーロッパの個人主義と日本の共同体主義の違い。それはどちらが悪い、悪いということではなく特質なです。

地図で見てみましょう。

ードイツ、フランス、スペインの地図上に同じ縮尺で日本の地図を重ねてみます。

そうすると、日本の大きさの中にそれぞれの国が入っています。それだけヨーロッパは他民族で文化も言葉も違うのです。

このようにヨーロッパでは、人が自分と違うということを意識する機会がたくさんあるということなのです。文化違いを意識しなくてはなりません。

コミュニティ形成の方法が異なり多民族環境にある欧州では、他人と自分とは違う存在であることが前提だがコミュニティ形成をするために、他者と合意を積み上げていくことが必須です。

コミュニケーションスキルの映像をもう一つ見ます。

ーなでしこジャパンの選手を養成している学校での授業の一コマ。絵を分析して、論理的に説明するという課題。論理を組み立て、それが伝わる文章を作る。例えば、病室だと思ふ絵が単に病室だと答えるのではなく、なぜ病室だと思ふのかというところを論理的に説明する。

医者だと判断するときも「心臓の音を聴く聴診器をつけていて、専門な資格が必要な注射を

うっているから医者である」と分析する。

これは物事を論理的に考える思考力や分析力を養うこと、それは試合中に求められる状況の分析と一瞬の判断、さらにそれを仲間に使えるコミュニケーション能力の育成につながります。11 人によるコミュニケーションが必要なので、試合中に得た情報をハーフタイムに伝え合い、チーム内で指示を出し合います。世界で戦える組織力を養っていてサッカーが上手くなるための周辺性が分かっているということが重要です。彼女たちはなぜこの授業をしているのか、目的を理解してやっているのです。

先ほどの小学校の授業の事例では、子ども達は目的を分かって学んでいないです。

目的を持たなくてはいけない年齢の時に、もう学生は勉強が嫌になってしまっているというケースもあるのではないのでしょうか。

今、言語力の教育の方はいろいろなところで実施されています。

芸術教育者（ファシリテーター）・専門人材（アートマネジメント人材など）の育成・活用がなされています。

現在、ワークショップの需要が高まっています。実際に施策もあり、コミュニケーション教育授業なども行われているのです。このように、言語力もコミュニケーション力も追い風を受けながら進んでいます。

PART.2

学ぶことが激変している

さて、成人スキルの国際比較(大人版の PISA 型学力観)という資料を見てみてください。

(1) 読解力

文章や図表を理解し、評価し、活用する力

(2) 数的思考力

数的な情報を活用し、解釈し、伝達する力

(3) ITを活用した問題解決能力

コンピュータやWeb等を使用して必要な情報を収集し、評価し、他の人とコミュニケーションをし、与えられた課題を解決する力

この(1)～(3)について16歳～65歳の成人の能力を国際比較をしています。

(3)はインフラの問題があるので、(1)(2)について話しましょう。

(1)読解力では日本が1位。日本のなかでの上位と下位の読解力の差も少ないという結果です。

(2)の16歳～65歳の成人の数的思考力も日本が1位。こちらも日本の上位を下位の差は少ないです。数的思考力も上位なのです。

ここで<4つの疑問>の一つ目の疑問が出てきます。1.モデルになる国がないとしたら。

こんなに上位ならどこか他の国を目指す必要がないのではないか？

これまで長く続いた「追いつけ、追い越せ」の教育の命題に不可欠のモデルとなる国が見当たらない場合、日本の成人に必要な能力は何なのでしょう。

<2030年あなたの仕事がなくなる？>という資料から、今後なくなるであろう職業のランクが出されています。ロボットが代われる職業などで順位付けされていたりしますが。ア

アメリカでは小学校の教員は残るであろう範囲にあります。日本はなくなるであろうという範囲にある。日本は少子化で小中学校の統廃合が進んでいくからです。そのように今後いろいろな職業が置き換えられていく予想がされています。しかし、仕事がなくなるというだけが必要な能力の次のめあてになっていくとは思えない。

学ぶことが激変する予感

教育と学習の間に学習方法の多様化 = INFORMATISATION (情報化) が進んでいます。学習機会の拡大 = 学校だけが学びの場ではないということが起きているのです。

<映像>

—ある女性がスノーボードを中心とした生活をがしたくて、雪のある半年は滑りながら旅館などでアルバイトをする生活。雪のない時期は生活費を貯めるためにアルバイトをする。海の近くに暮らしているので魚を自分で釣って調理している。そのときに魚の裁き方が見事。それをどこで覚えたのかを聞くとネットと答えた。

苅宿先生も、YOUTUBE で調べてみました。魚のさばき方で検索すると10500件もヒットしました。教えるという職がなくなるということ。ある程度テクニカルなこと、見よう見真似でできることを習うのはタダなのです。教える側としてはアップロードしてたくさんの人が使ってくれることは生きがいになるという面もあります。

これからプロフェッショナルは、どんどん自分の価値を確認するために技能無料で公開していくことになります。そのときに人と人をつないで知識の伝達をしていくということと、技能の模倣などがどうなっていくのか、よく考えていかなければならないです。

情報化が進むことでグローバルにつながっての学習ができるというという利点があります。

現在はタブレットで知識を得るシステムがどんどん導入されています。ここで考えるのは、何か失われて何かを得るということ。

(3)教えるということはどうなればいいのか？

教えるということが変わるところは変わる、変わらないところは変わらないですが、その部分を誰が見切っていくのでしょうか。それはひとり一人が考えていかなくてはいけないのではないかとこのところがポイントです。誰かが考えてくれるかもしれないがそれまではどうするのか。

われわれが考えていかなければならない。

私たちは知って考えていくということが求められているのです

PART.3

体験—省察—理論

自分のあたりまえにいる人は、人のあたりまえのことが考えられないです。自分の成功体験の中だけにいる人はそれが考えられない。

あたりまえは変わります。それはあなたの中にもあるのです。自分のあたりまえが他者とズレがあることを意識していることが必要です。

ここで苜宿先生が大学で実践しているワークショップデザインの授業を例に出してみます。

ワークショップデザインのめざしていること、そしてこの科目ではどんなことをするのでし

よう？それは体験—省察—理論です。

まず、メディア表現（タブレットを使って簡単な映像作品を作る。グループ作業）をやりま
す。遊びのように感じる学生も多いです。

このメディア表現を体験し、省察して理論を学ぶというサイクルの3回繰り返します。

また、仕組みとして2年生が授業を受ける-3年生が運営する-4年生が記録をとる。という
入れ子型の授業を行っています。最初学生はなぜ自分がこれをやっているのかよく分からな
いが、やればやるほど分かってくるようになります。実体験からリアルに分かってきます。
つまり、言われても分からなかったものに自分で気がつくことがとても重要なのです。省察
したことを人に伝えることができるようになってきます。

また、なぜ省察を学ばせたいのかを理論で学びます。理論を後付けしていく、ディスカッシ
ョンしていくと、やっていることの意味が分かってくるのです。

学習者をどうやって巻き込んでいくか？をデザインをしています。

なぜ省察を学ばせたいのか

学習の意味が変化している現状があります。今の大学生はその変化を知らずに学習していま
す。何百人もが一斉に座って先生の言うことをメモしているのが授業だと思っ
てはいけ
ない
と
言
う
こ
と
で
す。

「〇〇」から「△△」へという一元的な変化では学生は対応できません。簡単な置き換えで
はできないのです。特に教育や学習の場面ではできていません。

ここで、学習者に何が起きているのかを無視して教育は考えられないということです。

「教育はシンプル」で、「学習は多様で複雑」ということが定着してきている中、学習者一人

ひとりに何が起きているのかを聞く訳にはいかないで、そこをデザインしていくことが必要になってくるのです。公教育の意味を、その国だけでなく、国際的な方向性で考えていくことができる時代になりました。PISA 型や成人教育というものも同じです。なぜそういうものが出来たのかを考えていかなければならないです。

教育と学習の間を、まとめてみると、

教育 = シンプル、学習 = 複雑で多様で変化が起きる

教育と学習の間に社会的構造の多様化 = GLOBALIZATION (グローバル化)

学習方法の多様化 = INFORMATISATION (情報化)

がキーワードになってきます。

今では、ある知識をもらいそれを覚え、ある程度収まりよくまとめる力だけでは、学習したということの価値付けにはならないのです。

社会が求めているものとのギャップが、役に立つ授業かどうかの判断がされていますが、社会が求めているものは多様化してどんどん変容しています。だんだん分からなくなっています。また、学習の手立ても多様化している。学校教育が混乱している。これをなんとかまとめなければいけないと思っています。

知識はアクセスして簡単に手に入るので、これからの教育は自分が作った論、考えたこと感じたことをもう一回自分でクリティカルに見ること、要するに対象化して見ていく振り返りを見ていく、リフレクティブに見ていくことが重要なのです。

そこを強調して申し上げたいと思います。

私のワークショップデザインで大切にしていることは、自分なりのリフレクティブラーニン

グを重要視しているのです。

<映像> インスタレーションの事例

—あるメディアアーティストが大学の卒業制作のグループディスカッションで学んだ事例。
自分がやっていることの意味が後から分かってくる。学びを学ぶ感覚を学んだという事例。

(4) 考える子どもは育てられるのか まとめもかねて

「自分が出会うべき発想力、自分の考え方が分かった。それはリフレクティブラーニングでわかった。それをどういう風に我が物にしていくのか。」それが私やみなさんの課題なのです。

つまり、目標があってこれになればいいというシンプルなモノではなくて、自分の自分なりの出会うべき考え方とか、モノを持つ、自分ならではのモノを持つ、それで社会との距離をどのようにはかっていき、そして自分というものとどういう風に関わっていくのかということを考えていくこと。つまりそういうことが今必要とされているということを申し上げたいのです。

また、手段が目的化していないかも考えなくてはなりません。結果を模倣できればいいんだという、カタチが模倣できればゴールとすることが問題です。それは「考えていない」からです。

考えるということをどうやって意識化するか。気づきを生み出すのは普段使っていないところを使って無意識であったことが意識化されるということで、そこが重要です。それをどうデザインするかが問われます

PISA 型読解力とはこういう風にやればよいということではなく、考えるということはどういうことなのかということ。ゆえに学校教育でやる場合とか、人材育成でやる場合にはリフレクティブな活動表現をどうデザインするのが重要です。そのときに振り返って考えよう、と言っているだけではダメで、どうデザインするかなのです。

学習者は多様で複雑です。素直で真面目なお子さんだけと向き合って結果をみてはいけな
いということです。

こうなのだという話は提供しますが、どうやったら多様な学習者とつきあえるか、そこに持
ってこなくてはだめなのです。多様な中で学習をどうやって成立させるか。

これはいいこれは悪いとか、ついてこられるおさんはよくて、ついてこられないおさんが
悪いんだとしちゃいけないのです。

それはどうやったらできるのかを考えなければいけないということです。

質問タイム

<質問から>

- 納得解を感じられない場合、逆に排他を感じてしまうのではないかな？

納得解を特別なこととして考えるのではなくて、納得解は日常の中に埋め込まれてい
るということ。私たちは概念をどういう風に利用するかというと、納得解があるからそ
れを使わなくてはいけないということではなくて、何を知るために納得解があるのかを
考えるということ。それが大切です。

正解以外に何があるのかというと納得解があるということ。正解はちゃんとした答えの

ある問いはあるのです。でも答えのない問いもある。そういうものがあるということが分かるために納得解という概念を提示しています。

●納得解の排他性について

納得解だけをと取り上げて、納得解を育てなければならないということではなくて、全体のバランスの中で正解と納得解というものの区分けができると、そしてそれぞれの価値が分かることが重要です。もちろん最初から合意形成が生まれるわけではなく、ディスコミュニケーションが普通ですから、すれ違いはあるということです。でもそれが当たり前なのだから、逆に納得解が生まれたことに価値がある。

目的をキーワード化された概念だけに焦点を当てるのではなくてその周辺を考える。何の為にそれが使われているのかを考えるとよいのでは。

排他を感じることは、納得解の生成の難しさです。対立した A と B について受け入れられなかったとき、どうして受け入れられなかったかということ。足して 2 で割ることはなぜ出来なかったのか、一方がなぜ選ばれたのか、前提条件がどう違っているのかということから考えて行く。自分が排他されたとすぐに思うのではなく、なぜ自分の意見が受け入れられなかったかを考えることが大事です。私たちはコミュニティの中で、違った意見が出てくると、思わず排他をする。議論の中で収めるができなくて、人間のつきあい方にまで持ち込もうとしちゃう。ということに問題があるということに気づきましょう。

でも自分を否定する必要はないから、そういう風に考え違うんだなあと分かる必要はある。でもそこに固有の価値はあるけれども、それが絶対的な価値ではないことに気がつかなくてはいけない。

●納得解は時間がかかる？ どうやって教育現場にいれるか。

概念というのは概念だから、対立して A か B と捉えるのではなくて、正解を導くときにどういう導き方があるのかという納得解もある。算数である文章代で立式して答えを出しました。3つの立式があってもどれも答えは合っていました。

これは一番短い式がいいから、れがいいんだよということでは、ビデオに代替されていく。

リアリティがあるから価値がある。なぜそうなのかということ、なぜ短い式がいいのかということに答えられなければ意味がない。

●頭が固い人にどう納得解を伝えたらいいか

普段やらないことやって気づきを得る。普段使わない脳や部位をつかったり、活動をしたりして共同制作できればいいのではないのでしょうか。

●納得解の深さには違いがあるか？

個人差→納得解はこのレベルがいいレベル、悪いレベルというはなしではなくて、納得解に気づくプロセスが重要。プロセスというモノにどういう環境を整えるべきかということ、公教育ではそこに参加というモノが保証されることが重要です。

学校へ行かなくても勉強できる。だけど学校で学ぶと言うことは個のアイデンティティの形成、そこが重要になります。今、学校教育で重要なのは、代替え不可能性といって自分でなければできないこと、自分でなければ考えられないこと、自分ならではということに、どういう風に気づかせ保証していくか。なぜ学校教育にアート系のワークショップをいれるかということ、アートの表現は固有の有様を認めていくという多様性が保証されているからなのです。

●リフレクティブラーニングは何歳ぐらいからできますか？

5歳ぐらいから自分やっていることに対する規則というモノに気づいてきますから、だから返事挨拶あとしまつが出てくるのです。共同体のコミュニケーションでは重要です。

なので、やったことを振り返れるのは5歳ぐらいからでしょうか？

もちろん中学年以上ならできます。記憶の長さによって変わってきます。子どもの記憶の長さは短いです。

●振り返られない人がいたら先生ならどうしますか？

振り返るということだけに集中するのではなく、なぜ振り返えなければいけないかということを考えてください。メモを取るのも振り返りのためです。

メモを取らないということは個数をおある程度制限していくなどでトレーニングしていくと、リフレクティブが定着することになる。なぜやるのかということを考えましょう。

以上